老犬神社　――忠犬白の悲しい話――

むかし南部の草木(現、鹿角市大湯)というムラに、代々定六を名乗る腕のよいマタギが住んでいた。定六の先祖は有名な俵藤太といわれ、一七代目定六の腕は徳川家康の耳にも聞こえ、領主の南部太膳太夫信直からどこで狩猟してもよいという天下御免の許可鑑札を受けていた。

定六には小牛ほどもある「白」と呼ぶ秋田犬がいつも供をし、定六も白をわが子のようにかわいがっていた。ある日、定六はいつものように白をつれて狩に出かけたが、その日にかぎって兎一匹・山鳥一羽見かけることなく、がっかりしながら昼食をとっていた。と、その時、白がはるか彼方から一直線にこちらに向ってくる猪を見つけ定六に知らせた。心得のある定六は白を制し銃を手によく見ると、珍しく大きな猪だったので、これはよい獲物と近づくのを待っていた。この時、めったに向きを変えないといわれる猪がにわかに向きをかえ、もと来た道を駆け戻りかけた。「しまった、今がうちどき」と、定六の鉄砲は「ズドン」と一発火をふいた。さすがは名人定六の腕で猪はどっと横だおれになった。「それっ、白ノ」と、駆け寄ったとき予期しなかったことが起きた。白煙の下の猪がガバッと起きあがって猛然と逃げ出したのである。傷を負っているとも思われない早さで、猪は小枝をとばしてどこまでも逃げ、必死に追いかける定六と白は、鹿角の境の来満峠の峰を越え、夜となってついに猪を見失ってしまった。しかし、そこは名人定六のこと、あきらめることもなく残る足跡をたどってついに三戸城近くで、やっと猪を発見しはやる心をおさえて一発、とうとう猪を射ち果たした！と思った瞬間、不思議なことに猪の姿は消えていた。定六は夢見ごこちで苦労も水の泡と、白を呼び重い足をひきずり帰ろうとした時、「貴様は何者だ。お城に向かって発砲するとはふとどきである」と、役人が有無をいわせず縄をかけようとしたので、「わたしは天下御免のマタギです。これこの通り」と、いいながら、いつも首にかけている巻物に手をやると、この日にかぎって巻物を家に忘れてきていたのだった。

定六の説得は役人に一笑され、死刑と決まり牢屋につながれてしまった。定六は物言えぬ白に、「あの巻物さえあれば…」と話しかけた。と、その時白は「ワン」と一声吠えるや、草木の里まで駆け戻り定六の家にたどりついた。しかし、定六の妻は白のねがいがわからず、白は夕方にむなしく三戸城へ引きかえして行った。白を見た定六は「白、あの巻物だよ。竹筒に入れている巻物。仏壇の下の引き出しにあるものだよ」と、悲しく語りかけると、白はふたたび草木へ駆け行き、仏壇の前ではげしく吠える白に、定六の妻はついに白のねがいと、定六が巻物を忘れていったことをさとり、「白、たのみますよ」と、声をかけ送り出したが、白が命がけで巻物を持って駆けつけた時には、定六は処刑されあわれ刑場の露と消えていた。変わりはてた定六の屍と対面した白は、屍を峠に近い森に運び、三戸城を眺めては恨みの遠吠えを幾夜もつづけた。この森は今も「犬吠え森」といわれている。

その後、定六の妻は白とともに十二所の葛原に隠を求め、菅原甚之丞の世話を受けたが、白は行方不明となっ

てしまった。その後、ムラ人や武士が馬に乗ってある場所を通ると、必ずそこで馬が驚いて狂奔し、制止がきかなくなって落馬することが起き、下馬しなければ通れなくなった。そこでその場所をよく調べてみると、小牛ほどもある犬の白骨体を発見することができた。定六のいい分を信じてくれなかった武士への白の怨念のためであろうということになって、ムラ人は白のために供養を行い、白の哀話に同情する十二所の人々によって、葛原山の中腹に今も残る老犬神社を建立した。それで葛原のムラではその後、犬を殺したり肉を食べたり、犬の毛皮を着るなどということは禁じられ、現在まで「白」の哀話を伝えている。